

令和4年度 卒業論文

論題：日本サッカーにおける若手育成の実態と今後の展望

ースペインの若手育成に学ぶー

担当教員名：平川 幹和子

九州産業大学 商学部

学籍番号：19CB458

氏 名：福山 一之

【要約】

なぜ、日本サッカーは世界大会で良い結果を残せないのだろうか。本論文では、スペインの若手育成組織を参考に日本の若手育成組織の実態を明らかにすることを試みた。さらに、若手育成組織だけではなく日本サッカーの現状を紐解くことで、どのような成長を遂げてきたかを整理する。世界大会で良い結果を残してきたスペインと比較することにより、日本の世界での立ち位置を再確認する。得られた結果をもとに日本の若手育成組織の課題を探り、改善策を提案することで、今後の日本サッカーの展望を述べる。 (233 文字)

目次

1. はじめに	1
2. 日本代表とスペイン代表の世界大会での現状.....	2
2.1. 日本代表の世界大会での現状.....	2
2.2. 日本代表の FIFA ランキングの推移.....	3
2.3. スペイン代表の世界大会での現状.....	4
2.4. スペイン代表の FIFA ランキングの推移.....	5
2.5. 日本代表とスペイン代表の類似点と相違点.....	6
3. 日本とスペインの若手育成の特徴.....	8
3.1. 日本とスペインの育成カテゴリー.....	8
3.2. 日本の若手育成の特徴.....	8
3.3. スペインの若手育成の特徴.....	11
3.4. 日本の若手育成の優秀な点と課題.....	13
4. 日本の若手育成の改善策.....	15
4.1. 練習の効率性の改善策.....	15
4.2. オフ期間の改善策.....	15
4.3. 日本の若手育成組織に外国籍選手を増やすための改善策.....	16
4.4. サッカーの競技人口を増やすための改善策.....	18
5. おわりに	20
参考文献	21

1. はじめに

2021年に東京オリンピックが開催され、日本は過去最多の金27個、銀14個、銅17個の計58個のメダルを獲得した。しかし、23歳以下の選手を対象とするオリンピックのサッカー競技では3位決定戦で敗れ4位となり、銅メダルさえ獲得できずに終了した。サッカー日本代表が最後にメダルを獲得したのは1968年のことであり、オリンピック競技の中でも23種目の中で19位であった¹。また、7大会連続で出場しているFIFAワールドカップでも最高成績がベスト16であり、他の競技と比較してもサッカーは世界大会で結果を残すことができないスポーツとなっている。

スポーツ庁が公表した学校運動部活動での実施種目では、男子が所属している部活動ランキングでサッカーは、中学生が4位、高校生が1位であった²。所属の割合としても、特定の部活動に人口が集中するといったことはなく、順位が1位の野球やバスケットボールと所属人数にほとんど差が無かった。つまり、日本では野球やテニスなど様々な部活動があるため、サッカーに競技人口が集中しないということである。競技人口が多いほど世界で活躍する優秀な選手が育つ可能性が高くなるだろうが、ベルギーやオランダなどの人口が1000万人ほどの国でもFIFAランキング³の上位に位置していることを鑑みるに、この結果は海外と日本での若手育成の違いではないかと考えられる。

そこで本論文では、世界屈指の育成大国であるスペインと日本の若手育成を比較し、今後の日本サッカーの課題を明確にして、それに対する改善策を探る。第2章では、現在までのサッカー日本代表の世界大会の結果からわかる日本の現状と、比較対象のスペインの現状について明らかにする。第3章では、日本の若手育成の特徴とスペインの若手育成の特徴を明確にすることによって、日本の若手育成の課題を発見する。第4章では、得られた結果を受けて考察するとともに、日本の若手育成の優秀な箇所を探り、同時に改善策を提案する。第5章ではまとめとして、本論文の結論を述べる。

¹ オリンピック 日本の競技別メダル数ランキング

https://entamedata.web.fc2.com/sports/olympic_medal_j.html (参照 2022-11-01)

² 中学生・高校生の学校運動部活動の活動実態

https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/topic_pdf/sld_chid2019_topic_D.pdf (参照 2022-11-01)

³ FIFA 世界ランキング <https://www.tsp21.com/sports/soccer/fifaranking.html> (参照 2022-11-02)

2. 日本代表とスペイン代表の世界大会での現状

2.1. 日本代表の世界大会での現状

サッカー日本代表の実力を明確にするために、年齢制限が無く各国が優勝を目指して本気で戦う FIFA ワールドカップの現在までの結果を整理する。

FIFA ワールドカップ本戦に出場するためにはアジア予選を突破する必要がある。FIFA ワールドカップ本戦ではアジアが 4.5 枠あり、最低 4 ヶ国、多ければ 5 ヶ国参加することが可能である。イタリアやコロンビアなどの FIFA ランキングの上位に位置している強豪国が FIFA ワールドカップに参加できずに悔しい思いをしているなか、日本代表は 7 大会連続で FIFA ワールドカップ本戦出場を果たしている。2022 年のカタールワールドカップアジア最終予選でも、サウジアラビアに次ぐ 2 位でグループステージを突破している⁴。日本代表のアジアの中での立ち位置というのは、毎回 FIFA ワールドカップ出場を決めている強豪国ということになる。

本戦における FIFA ワールドカップのグループステージでは、強豪国同士や同じ地域が重ならないように工夫して国が決められており、各グループ 4 ヶ国で決勝トーナメント出場を争うことになる。出場する全 32 ヶ国で FIFA ランキングの順番からポット 1~4 まで決まっており、日本代表はポット 3 に入っている。つまり、FIFA ワールドカップ出場国の中でも半分より下に位置付けられており、強豪国と比べても力関係では劣っていることがわかる。

日本は 1998 年の FIFA ワールドカップ（フランス大会）から参加をしているが、現在までの成績は最高でもベスト 16 止まりである。2002 年の FIFA ワールドカップではアジアで初めて開催され、日本と韓国で共同開催された FIFA ワールドカップ（日韓大会）では、韓国が史上初のベスト 4 まで進んだのに対し、日本はベスト 16 で敗退した。FIFA ワールドカップでは気温や環境を知っている開催国が有利といわれており、実際に開催国のグループステージ突破の確率は 95% を超えている⁵。1930 年から始まった 21 回のワールドカップで開催国なのにベスト 16 までしか進めなかった国はアメリカと日本と南アフリカだけである。FIFA ワールドカップ（日韓大会）は日本で開催されホームという大きなアドバンテージがあったにも関わらず、ベスト 16 までしか進めなかった。

また、日本代表は現在までワールドカップに出場する度にグループステージ敗退とグループステージ突破を交互に繰り返している⁶。ジンクス通りにいけば、2018 年の FIFA ワールドカップ

⁴ 日程・結果 | アジア最終予選(Road to Qatar)

https://www.jfa.jp/samuraiblue/worldcup_2022/final_q/schedule_result/ (参照 2022-11-05)

⁵ [FIFA]W 杯開催国はグループリーグ突破の可能性が高い?!

<https://footballnote.jp/2018/06/11/trend-wc3/> (参照 2022-11-06)

⁶ 日本代表のワールドカップ(W 杯)成績

<https://web.gekisaka.jp/pickup/detail/?228829-228829-fl> (参照 2022-11-06)

(ロシア大会)ではグループステージを突破したため、2022年のFIFAワールドカップ(カタール大会)では敗退することになる。日本が強豪国になるためにも、毎大会のグループステージを安定して突破することを期待したい。

2.2. 日本代表のFIFAランキングの推移

サッカー日本代表が過去から現在までどのように成長してきたかを明確にするために、FIFAランキングの推移を見る。FIFAランキングとは、国際サッカー連盟が発表している国際Aマッチでの国の強さを表すランキングである。順位が高いほど勝利が多く、強豪国という立ち位置となる。FIFAランキングの発表が始まった1993年から2022年までの日本の順位をグラフにしたものを図1に示す。

図表1 サッカー日本代表のFIFAランキングの推移



出所：サッカー日本代表のFIFAランキング推移

<http://www.fifa-box.com/team/Japan.html> (2022-2-10)

サッカー日本代表のFIFAランキングの推移を見てみると、順位の変動が激しく安定していないことがわかる。Jリーグが始まった1993年頃は40位代に入っていたが、1994年に54位に落ちたからは安定して順位を上げていることがわかる。1993年からJリーグが始まり、日本のサッカーを人気コンテンツとして押し上げた。1993年にJリーグという言葉が流行語大賞に選ばれ、多くの日本人がサッカーに熱中したことも安定して順位を上げる要因となった。最高順位は1998年の9位であり、TOP10に入っていた。当時のFIFAランキングは現在とポイントの計算の方法が違っており、国際試合で得た勝ち点を累計するような方式だったため、試合をより多く

こなした国の順位が上がり、日本代表が9位になった。逆に、最低順位は2000年の62位であり、たった2年で50位以上も順位を落とすことになった。2019年頃からは順位が大幅に動くことは無く、20~30位に安定している。アジアの国のなかでは日本はイランに次ぐ2位となっており、隣の韓国やサウジアラビアよりも高い順位に位置している。現在では日本はアジアの中では強豪国という立場になるが、昔から強かったわけではなかった。

2.3. スペイン代表の世界大会での現状

日本代表の世界大会での現状をまとめたが、次に若手育成が上手くいっており、優秀な選手を多く輩出しているスペインの世界大会での現状をまとめる。

スペインはFIFAワールドカップに出場した全15大会のうち、2010年のFIFAワールドカップ（南アフリカ大会）で優勝している⁷。スペイン代表は毎大会で優勝候補として期待されていたが、2010年に初めての優勝を経験した。しかし、強豪国が集まるワールドカップということもあり、他の大会ではベスト16やベスト8で敗退していることが多い。サッカーは優秀な選手がいるだけでは勝つことができず、監督の手腕やチームを応援するサポーターなども重要な要素となる。また、スペインは代表チームを応援する熱が低い国として知られている。理由としては、カタルーニャやバスクの人々のなかには独立志向を持っている人が多く、代表チームを応援することに強い抵抗感を持っていることがあげられる。政治とスポーツは切り離すべきであるといわれているが、国を背負った選手たちが戦う以上、代表チームの在り方を考える必要がある。

次に、現在までの23歳以下の選手を対象とするオリンピックのサッカー競技での結果をまとめる。

2021年に行われた東京オリンピックでは、準決勝で日本を倒して銀メダルを獲得した⁸。スペインはビッグクラブで活躍している若くて優秀な選手が多いだけでなく、オーバーエイジ枠の24歳以上の3人も優秀なため、個の力で日本は勝利することができなかった。スペインは安定してメダルを獲得しているが、最後に優勝したのは1992年のバルセロナ大会まで遡る⁹。オリンピックのサッカー競技は一強状態ではなく、毎大会どこの国が優勝するかわからないため、スペインは必ずしも良い結果を残しているわけではないことがわかる。しかし、オリンピックのサッ

⁷ スペインのW杯全成績 <https://worldcdb.com/WCspain.htm> (参照 2022-11-09)

⁸ 男子：日程・結果 | 第32回オリンピック競技大会(2020/東京)
https://www.jfa.jp/national_team/u24_2021/tokyo_olympic_2020/schedule_result/ (参照 2022-11-09)

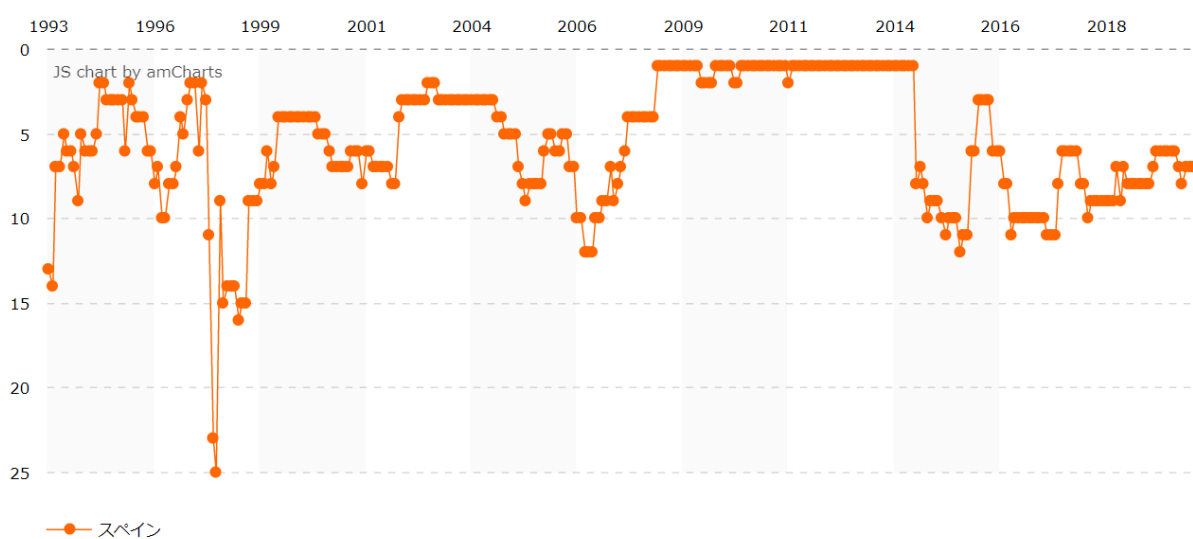
⁹ 歴代優勝国とメダル獲得国は？日本代表の成績も紹介！
<https://senpowalker.com/olympic-soccer-championship-medal/> (参照 2022-11-10)

カー競技は23歳以下の若い選手が対象となるため、国の育成力が鍵となる。かなりの頻度で上位に進出しているスペインは優秀な若手育成組織が整っているといえる。

2.4. スペイン代表の FIFA ランキングの推移

現在では強豪国といわれているスペインだが、過去から現在までどのように成長してきたかを FIFA ランキングの推移を参考にして明らかにする。FIFA ランキングの発表が始まった1993年から2022年までのスペインの順位をグラフにしたものを図2に示す。

図表2 サッカースペイン代表の FIFA ランキングの推移



出所：サッカースペイン代表の FIFA ランキング推移

<http://www.fifa-box.com/team/Spain.html> (2022-2-10)

スペイン代表の FIFA ランキングの推移を見ると、優勝した2010年 FIFA ワールドカップ（南アフリカ大会）から2014年の FIFA ワールドカップ（ブラジル大会）までのほとんどの期間を1位で過ごしている。その後は、少し順位を落としながらも10位以内に入っており、安定して上位に位置している。逆に、最低順位は1998年の25位となっており、前年の2位から大きく順位を下げることとなった。1998年は FIFA ワールドカップ（フランス大会）が開催された年であり、スペインは優勝を期待されながらもグループステージを敗退している。ナイジェリアやパラグアイなどの中堅国に勝利できなかったことが FIFA ランキングを下げる大きな要因となった。

こうしてみると、FIFA ランキングの高い国が世界大会で必ずしも良い結果を残すことができるわけではないことがわかる。前回の FIFA ワールドカップ（ロシア大会）で優勝したフランス

は現在の FIFA ランキングで 4 位となっており、TOP3 にも入ることができていない。FIFA ランキングの高い国が世界大会で必ず良い結果を残すことができるというわけではないため、あくまでも目安として考える必要がある。

2.5. 日本代表とスペイン代表の類似点と相違点

図表 3 に日本代表とスペイン代表の類似点と相違点をまとめた。

図表：3 日本代表とスペイン代表の比較

	日本代表	スペイン代表
人口	1 億 2,322 万人	4,733 万人
FIFA ワールドカップ予選	7 大会連続突破	12 大会連続突破
各大陸での立ち位置	強豪国	強豪国
FIFA ワールドカップ最高成績	ベスト 16	優勝
オリンピックサッカー競技 最高成績	銅メダル	金メダル
オリンピックサッカー競技 メダル獲得数	1 個	4 個
FIFA ランキング	徐々に順位を上げてきた	20 年前から TOP10 に入ることが多かった
戦術	ポゼッション	ポゼッション

まず、日本代表とスペイン代表の類似点として安定して FIFA ワールドカップに出場している点があげられる。FIFA ワールドカップ本戦に出場するためには各大陸で予選を突破する必要がある。強豪国でも予選を突破できずに敗退しているなか、日本代表は 7 大会連続、スペイン代表は 12 大会連続で出場している。FIFA ワールドカップは 4 年に 1 度しか開催されないため、本戦に出場できなければ国民を落胆させることになり、サッカーの人気に影響する。日本とスペインは毎大会安定して FIFA ワールドカップ本戦に出場しているため、国民が 4 年に 1 度サッカーに熱中することができるのは大きなメリットとなる。さらに、目指しているサッカーの戦術も類似点としてあげられる。どちらの国もポゼッションサッカーを採用しており、ショートパスを中心にボールを保持しながら相手の陣形を崩すことを試合で行っている。ポゼッションサッカーでは正確なパスやトラップが必要になるため、小柄で技術のある日本人に合っている戦術といえる。スペイン代表はティキ・タカと呼ばれる洗練されたパスワークを用いて世界大会で良い結果を残

してきた。ポゼッションサッカーという同じ戦術を採用していても選手の質に差があるため、日本代表が強豪国になるためにも選手の質を高める必要がある。

また、日本代表とスペイン代表の相違点として世界大会での結果に差があることがあげられる。23歳以下の選手を対象とするオリンピックのサッカー競技では、日本がメダルを獲得したのは1968年の1回だけであるが、スペイン代表は4回メダルを獲得している。そのうち、1992年のバルセロナ大会では金メダルを獲得しており、自国開催という優位性を活かすことができた。FIFAワールドカップでも、日本代表の最高成績はベスト16であるが、スペインは優勝を経験している。日本代表とスペイン代表はFIFAランキングでも相違点があり、徐々に順位を上げてきた日本代表に対して、スペイン代表は20年前からTOP10に入っていることが多かった。少しずつ力を付けてきた日本代表と、昔から強豪国という立ち位置だったスペイン代表では積み上げてきたサッカーの歴史に違いがある。日本代表とスペイン代表を比較すると世界大会で残してきた結果やFIFAランキングに大きく差があり、実力で劣っていることが明確となった。

3. 日本とスペインの若手育成の特徴

3.1. 日本とスペインの育成カテゴリー

日本とスペインでは育成カテゴリーに違いがある。日本とスペインの育成カテゴリーを図表 4 として載せる。

図表 4：日本とスペインの育成カテゴリー

日本	スペイン
ジュニア (小学 1 年生から 6 年生)	プレベンハミン (小学 1 年生と 2 年生)
	ベンハミン (小学 3 年生と 4 年生)
	アレビン (小学 5 年生と 6 年生)
ジュニアユース (中学 1 年生から 3 年生)	インファンティル (中学 1 年生と 2 年生)
	カデーテ (中学 3 年生と高校 1 年生)
ユース (高校 1 年生から 3 年生)	フベニール (高校 2 年生から大学 1 年生)

日本の育成カテゴリーでは小学生の 6 年間、中学生の 3 年間、高校生の 3 年間といったように義務教育で分けられている。一度チームに所属すると別のチームに移籍するといったことはなく、基本的に卒業するまで同じチームでプレーする選手がほとんどである。優秀な選手は強いチームからスカウトされることもあるが、頻繁に行われているわけではない。また、日本ではサッカーをするために月謝や遠征費、年会費を支払う必要がある。強豪校や J リーグクラブの下部組織は遠征をすることも多く、年間に数十万円ほどかかることがある。

一方、スペインの育成カテゴリーでは 2 歳ごとに分けられている。スペインでは小学生以上では 6 つのカテゴリーに分かれており、日本よりも多い。また、カテゴリー別のリーグ戦を用意しており、子どものときから勝ち負けにこだわっているのは日本と比べて大きな違いとなる。カテゴリーを細かく分けることで子どもの時から優勝、残留、さらに降格を経験することができる。チームを移籍することもできるため、上を目指したい選手の成長を促すこともできる。また、ビッグクラブの下部組織では世界中から優秀な選手をスカウトすることが多いため、選手や家族のために住む場所を提供していることが多い。日本とスペインでは観客数やスポンサーなどの理由によりクラブの収入に差があり、下部組織の選手たちに使うことができる費用の面でも違いがある。

3.2. 日本の若手育成の特徴

日本の育成カテゴリーで一番下の小学生年代となるジュニアでは、戦術を教えるといったこと

は無く、基本的な技術を教えることが多い。勝敗よりもサッカーを楽しむことを好む子どもがほとんどである。小学校に部活動は無いため、サッカーをしたい小学生は地域のクラブチームかＪリーグクラブの下部組織に所属することになる。

小学校を卒業してからは、中学校の部活動に所属するか、ジュニアユースに所属するかを決めることになる。中学生年代から本格的にプロを目指す子どもたちが多く、技術のある選手はＪリーグクラブの下部組織に所属することが多い。高校と比べると中学校は強豪のサッカー部が少なく、ジュニアユースに優秀な選手が集まることが多い。

高校生年代ではプロサッカー選手になるには強豪校とユースのどちらかを選ぶことになる。部活動は学校の教育として考えられているため、上下関係などの技術以外の精神面でも鍛えられる環境がある。高校サッカーは部活動であり、専門の監督やコーチが必ず存在するわけではない。ゆえに、プロサッカー選手を目指す人は強豪校を選ぶことになる。プロサッカー選手になるためには強豪校で活躍してＪリーグクラブからオファーを貰う必要がある。高校受験に合格すれば誰でもサッカー部に所属することができるが、強豪校は部員数も多いため県大会や全国大会で目立った活躍をしないとＪリーグクラブから声が掛からないという現状がある。一方でユースでは、Ｊリーグクラブの下部組織ということもあり、プロと一緒に練習をする機会があるなどプロサッカー選手と関わるができる環境がある。ユースは人数が少なく少数精鋭で活動しており、トップチームに昇格すればプロサッカー選手になることができるという大きなメリットがある。しかし、ユースに所属するには入団テストがあり、一定の基準の技術や身体能力が必要になるため誰でも所属することができるわけではない。

日本では、プロサッカー選手になるためには強豪校とユースのどちらに所属するのが良いか迷う人も多い。2022年にＪリーグクラブから内定を貰った選手は、高校出身が38人、ユース出身が49人だった¹⁰。高校出身と比べてユース出身の方が10人ほど多かったが、大きく差があるといったことはなかった。しかし、毎年高校出身の選手よりもユース出身の選手の方が内定を多く貰っており、プロサッカー選手になるためにはユースに所属する方が少し有利ということになる。また、2022年のFIFAワールドカップ（カタール大会）で日本代表に26人選出されたが、高校出身が13人でユース出身が13人だった。世界の舞台で活躍している選手でもどちらかに偏っているということはない。さらに、最も多くＪリーグクラブから内定を貰ったのは大学出身の選手となった。理由としては、高校やユースの選手たちと比べてフィジカル面で有利なため、即戦力として獲得されている。プロサッカー選手として生活をしていくのは簡単なことでは

¹⁰ Ｊリーグプロ内定・新加入選手推移表

<https://no-football-no-life.com/2019-new-player-affiliated-team/>（参照 2022-11-14）

ないため、引退した後のセカンドキャリアを考えて大学に進む選手も多い。日本の育成カテゴリーの各年代の特徴を図表5として載せる。

図表5：日本の育成カテゴリーの各年代の特徴

小学生年代	中学生年代	高校生年代
<ul style="list-style-type: none">•まずはサッカーの楽しさを教える•自分の意見よりも指導者の教を優先する	<ul style="list-style-type: none">•優秀な選手はジュニアユースに所属する•強豪のサッカー部が少ない	<ul style="list-style-type: none">•プロを目指す選手は強豪校かユースに所属する•プロになる最初の年代である

また、日本の若手育成の特徴として、子供たちがゴールキーパーをやりたがらないことがあげられる。実際、ゴールキーパーとして活躍した日本人選手は他のポジションの選手と比べて圧倒的に少ない。ゴールキーパーは身長や体格が重要な要素となるため、海外と比べて平均身長が低い日本人には向いていないポジションとなる¹¹。ゴールキーパーは他のポジションと比べて仲間に指示をする機会が多く、海外でプレーするには外国語を勉強する必要があり、監督としても外国語を話せない日本人を起用することが難しくなる。日本の若手育成組織は練習のなかで技術や筋トレだけではなく、海外で活躍するために外国語を勉強する時間を作ってもいいのかもしれない。

日本の若手育成の全ての年代に当てはまることとして練習時間が長いことがあげられる。強豪校では朝から練習が始まり、学校が終わって放課後から夜にかけて練習をすることが多い。休みも一週間に一日しかない学校も多く、土曜日と日曜日は練習や試合をすることが当たり前となっている¹²。夜遅くまで自主練習や走り込みを行う学校も多く、体に負担がかかる日程となっている。プロの選手でも年間に一ヶ月程オフの期間があるのに対して、日本の育成組織では年末年始だけしかまとまった休みが無いことも珍しくない。日本では練習をすればするほど上達するという考え方が根付いているが、仮にそうだとしたら世界大会で良い結果を残せていないことに疑問

¹¹ 図録 平均身長の国際比較 <https://honkawa2.sakura.ne.jp/2188.html> (参照 2022-11-16)

¹² 長時間練習、休日なしの練習は誰のためなのか。

<https://news.yahoo.co.jp/byline/kiyokotaniguchi/20160428-00057140> (参照 2022-11-16)

が残る。指導者も生徒のことを思って長い時間を練習に充てているが、選手は疲労を回復する時間が無いため、怪我やコンディションの悪化に繋がる。日本人の強くなるには練習時間が長いほど良いという考え方をもう一度見直す必要があるだろう。

3.3. スペインの若手育成の特徴

次に、世界でも若手育成を高く評価されており、有名なサッカー選手を多く輩出しているスペインの若手育成について述べる。スペインでは部活動というものはなく、子供たちがサッカーを始めるときはプロクラブの下部組織に所属するか地域のクラブチームに所属することになる。しかし、スペインでプロサッカー選手になるにはプロクラブの下部組織に所属してトップチームに昇格することが一般的である。世界最高の選手と称されているリオネル・メッシは13歳の時にアルゼンチンからバルセロナの下部組織に入団した。子供のときから才能がある選手はスペインのクラブにスカウトされることが多く、スペインの育成の評価の高さが伺える。しかし、ビッグクラブの下部組織ともなると練習施設や環境などが整っているため、入団を希望する子供が多く競争率が高くなる。また、ビッグクラブの下部組織では世界中から優秀な選手をスカウトすることにより、自国の選手が少なくなってしまう弱体化に繋がるのではないかと危惧されている¹³。近年では、ビッグクラブの下部組織に所属する日本人も増えてきている。

スペインでは12歳まで7人制サッカーを取り入れている。理由としては、コートサイズが小さく人数が少ないことにより多くの選手がボールに関わるができるため、テクニックや戦術眼の成長を促すことができるからである。小学生年代から試合の動画やホワイトボードを使って子どもたちに戦術を教えることは日本と比べて大きな違いとなる。

中学生年代から11人制サッカーに移行し、プロと同じ人数で試合を行うことになる。プロクラブの下部組織では1人でも多くの少年の才能を磨いて、トップチームへ送り込むことを目標にしている。若い年齢から活躍できるように、育成カテゴリーの各年代でトップチームと同じ戦術を学ぶことも特徴である。中学生年代からBチームやCチームが作られることが多く、選手たちはAチームのスタメンでプレーするために練習の時から集中して取り組んでいる。優秀な選手は上のリーグでプレーし、結果を残せなかった選手は下のリーグでプレーすることになる。子どものときから競争を意識することにより、ストレスやプレッシャーなどに耐性を付けることができる。

¹³ スコールズ氏がビッグクラブの下部組織の現状を嘆く「英国人にチャンスが与えられていない」

<https://www.theworldmagazine.jp/20151030/01world/england/25336> (参照 2022-11-17)

高校生年代からはフベニールに所属することになり、トップチームに上がるには結果を残す必要がある。スペインの育成カテゴリーでフベニールへの昇格が一番難しいといわれており、18歳未満の外国籍選手移籍の規制が解除される年代なため内部昇格のライバルが増えることになる。さらに、フベニールではトップチームの選手たちと練習を行うことができるため、プロを目指す選手のために良い環境が整えられている。ビッグクラブのトップチームは有名な選手が多く、フベニールの選手たちに良い影響を与えることができる。スペインの育成カテゴリーの各年代の特徴を図表6として載せる。

図表6：スペインの育成カテゴリーの各年代の特徴

小学生年代	中学生年代	高校生年代
<ul style="list-style-type: none"> •基礎技術だけではなく戦術も学ぶ •7人制サッカーである 	<ul style="list-style-type: none"> •スタメン争いが激しくなる •11人制サッカーになりプロと同じルールでプレーする 	<ul style="list-style-type: none"> •外国籍選手が加入する •トップチームの選手たちと練習をすることができる

また、スペインの若手育成では日本のように長時間の練習をすることはなく、短い時間で集中して行うという特徴がある。普段の練習からインテンシティを意識しており、短い時間で質の高い練習を行っている。現実に近い状態でトレーニングをすることが一番良いと考えられており、90分以上の練習を行わないことで体に負担をかけないようにしている。スペインのプロクラブの下部組織では毎週一試合のリーグ戦が行われており、選手たちは試合に選ばれるために練習を行っている。仮に試合に出ることができなかつたとしても、次週のリーグ戦に出ることを目的に必死に練習をするためチーム内での競争が激しい特徴がある。スペインの若手育成では、週1回の試合に向けて短い時間で集中して練習をさせることで、チーム内での競争力を重視している。

さらに、スペインの若手育成では練習と同じくらい休むことを重視しており、シーズンが終わると2ヶ月程の休みに入る¹⁴。スペインだけではなくアルゼンチンでも12月と1月の2ヶ月間は休みを取っている。オフの期間に練習をして他の選手と差を付けようといった考え方は無く、

¹⁴ 「日本サッカーの非常識」1日も休まない日本より、2ヶ月休むスペインほうがなぜ強いのか

<https://president.jp/articles/-/40038?page=1> (参照 2022-11-18)

趣味や家族との時間を大切にしている。練習量に比例して技術が上達するといった考え方は無いため、日本との大きな違いである。

3.4. 日本の若手育成の優秀な点と課題

日本の若手育成の優秀な点は、プロサッカー選手を生み出す間口の広さである。スペインでは、プロサッカー選手になるためにはプロクラブの下部組織に所属してトップチームに昇格することが必要となる。タイミングとしては18歳が一般的であり、年齢が上がるにつれて選手の価値が下がっていくことによりプロになることが難しくなる。日本では、Jリーグクラブの下部組織だけではなく高校の部活動出身者でもプロクラブからオファーを貰うことが可能であり、厳しい入団テストを突破しなくても活躍次第ではプロサッカー選手になることができる。さらに、18歳のタイミングでプロクラブから声が掛からなかったとしても、大学に進学して活躍することで22歳でもプロサッカー選手になることが可能である。敢えて大学進学を選ぶことでフィジカルやセカンドキャリアの形成に繋げる選手もいるため、いつプロサッカー選手になるかを選ぶことができる。日本のように誰でも学校でサッカーを楽しむことができ、なおかつプロになる機会が作られているのはスペインの若手育成と比べて優れている点となる。

また、2011年には高校サッカー部とJリーグクラブの下部組織がリーグ戦として試合をするプレミアリーグが始まった。高校生年代における全国の強豪20チームが西日本と東日本の10チームずつに分かれて参加する。全国高等学校体育連盟に所属している部活動のチームと、Jリーグクラブの下部組織のチームが試合をすることができる。高校生年代の日本一を決めると同時に降格もあり、緊張感のある試合を行うことができる。プロクラブのスカウトも多く訪れるため、ここが優秀な選手の発掘場となっている。また、プレミアリーグはホーム&アウェイ方式となっており、選手やスタッフの移動に大きな交通費がかかる。しかし、費用の一部を日本サッカー協会が負担しているため、試合に帯同できない選手を作らないようにしてプレーをしやすい環境を整えている。スペインには存在しない高校サッカー部は、選手の成長を促すことができる大きなメリットである。

また、日本の若手育成の課題として、練習の効率性が挙げられる。日本の若手育成ではスキルを習得するために反復練習や練習時間を重視している。それに伴い、オンとオフの切り替えが難しくなっており、短い時間で集中して効率的に行うといったことができていないことがわかる。日本人の勤勉なところは長所でもあるが、オフ期間も設けずに毎日のように長い時間をかけて練習をすることに効果があるのだろうか。

さらに、日本の育成組織ではスペインのように世界中から優秀な選手がスカウトされて集まってくる訳ではないため、日本とスペインでは選手の質に差がある。優秀な選手と練習をすること

によって、チーム内でのレベルアップに繋がる。一緒にサッカーをする時間が一番長いのは対戦相手ではなくチームメイトであり、常に高い水準で練習を行うことができるのは大きなメリットとなる。日本人選手の質を高めるには、世界中の優秀な選手をスカウトして日本の若手育成組織で育てることも必要となる。

日本は競技者人口がサッカーに集中しておらず、どのようにして子どもたちにサッカーを選んでもらうかも課題となる。日本では野球やテニスなど様々な部活動が用意されており、サッカーに競技人口を集めることも今後の日本サッカーの発展に大きく関わってくる。強豪国では人口に対するサッカーの競技者人口比率が高く、競技人口が多いほど優秀な選手が育つことが予想される。少子化のなかでサッカーの競技者人口を増やすためには様々な工夫が必要となる。

以上のことより、日本の若手育成の課題として、以下のような点が挙げられる。

- 練習の効率が悪い。
- 休日が少なく体に負担をかける。
- 育成年代から優秀な外国籍選手とプレーをすることが少ない。
- 少子化のなか、競技人口がサッカーに集中していない。

これらについては第4章において改善策を提案する。

4. 日本の若手育成の改善策

4.1. 練習の効率性の改善策

まず、日本の若手育成の課題として練習の効率性が悪いことが挙げられる。実際、長い時間をかけて練習をしている日本よりも短い時間で集中して練習しているスペインの方が世界大会で良い結果を残している。日本の若手育成組織は、指導者も選手も長い時間練習をすることで安心しているのではないだろうか。自分たちは長い時間練習をしているから強くなるという思い込みが日本の若手育成組織に根付いている。最も非効率な練習は、技術習得や体力向上などの区別をせずに目的を持たずに練習をすることである。スペインの若手育成組織のように目的ごとに短い時間で集中して練習を行うことが効果的で効率的である。日本の若手育成組織は練習の時間や目的を明確にすることを改善策として提案したい。

また、フィジカルコーチや GK コーチなどのジャンルごとのコーチを用意することによって練習の効率に繋がる。専門のコーチがいることで指導者は選手の選考や戦術に集中することができるため、マルチタスクをする必要がない。優秀な選手が集まる強豪のチームはそれぞれのジャンルのコーチが在籍しているが、弱小チームや県立高校は予算などの関係でコーチがいないことが多い。今後も、プロを目指す選手は環境を求めて強豪チームに行くことが予想される。強豪チームだけではなく様々なチームに専門のコーチを用意することで練習の効率化に繋がり、日本の若手育成組織の底上げをすることができる。プロフェッショナルのコーチを派遣している会社も存在するため、チーム内に指導者だけではなくコーチも用意することが当たり前とするチーム作りが必要となる。

さらに、選手を積極的に褒めることで練習の質が大きく高まることになる。指導者が選手に対してフィードバックをする際に褒めることで、選手のモチベーションの向上に繋がる。その際、結果だけではなく努力や過程に注目し、成長を褒めると選手のメンタルに良い影響を与える。指導だけではなく意識して褒めることで、選手の成長を促すことが可能である。選手を上手く褒めることによってフィードバックが効果的になり、練習の質を高めることができる。

以上のことより、練習の効率性の改善策として、以下のような点が挙げられる。

- 目的ごとに短い時間で集中して練習を行う。
- 指導者だけではなくジャンルごとのコーチを用意する。
- フィードバックの際に選手の成長を指導者が積極的に褒める。

4.2. オフ期間の改善策

2つ目に、日本の若手育成組織の課題として休日の少なさが挙げられる。日本ではオフ期間が無いために疲労を回復する時間が短いため、選手の怪我やコンディション不良に繋がる。長い時

間練習をするのではなく、オフ期間を設けてメリハリをつけるほうが今後の日本サッカーの発展に繋がると考える。休む時はしっかり休んで、集中するときは一生懸命頑張ることで練習の効率や集中に繋がる。空いた時間で趣味や家族との時間も大切にできるため、サッカーだけではなくプライベートも充実させることができる。

練習の効率性を改善することでオフ期間を確保することができる。日本の若手育成組織は長時間の練習を行っていることが多いため、集中して短時間で終わらせることで時間が空くことになり、休日を作ることができる。現在は練習や試合があるため、週に1日しか休みがないチームも多く、選手の怪我に繋がるだけではなくプライベートの時間も少ない。また、週末は試合などで1日中プレーをしており、休みは月曜日の放課後だけというチームが多い。1日中オフという日が無く、コンディション不良に繋がるため、最低でも週に2日の完全オフの日を作るべきである。週に2日の休みがあるとプライベートの予定も立てやすく、ライフワークバランスを保ちやすくなる。2日間の休日ですフレッシュできるため、サッカーに集中することができ、効率の良い練習をすることができる。オフ期間の改善策として、各チーム最低でも週2日の休みを確保することを提案したい。

また、強豪チームではオフ期間に自主練習をする選手も多く、自分では気付かずにオーバーワークをしていることが多い。プロになるために周りの選手と差をつけようと自主練習をする人もいるが、ただでさえ少ない休む時間に体を動かしては疲労が取れず、本末転倒である。時間だけを浪費するような自主練習には意味が無く、自分に足りない要素を正確に把握して、短時間で集中して終わらせる必要がある。「練習をした」という満足感を得るために自主練習を行うのではなく、目的と時間をしっかり決めて取り組むことが重要となる。そのためにも、指導者がチーム練習だけではなく各選手の自主練習にも気を配り、オフ期間にはボールや道具を使わせないとといったルール作りが必要となる。

以上のことより、オフ期間の改善策として、以下のような点が挙げられる。

- 練習に集中するために完全週休二日制にする。
- 自主練習をするときは目的と時間を正確に決める。

4.3. 日本の若手育成組織に外国籍選手を増やすための改善策

3つ目の課題は、日本の若手育成組織には世界中の優秀な外国籍選手がチームに在籍していないことである。世界中の優秀な選手たちがJリーグクラブの下部組織に所属したいと思うためには、素晴らしい練習環境と指導が必要になる。日本には綺麗なグラウンドや多くの道具が揃っているため、環境面は優れている。しかし、世界で活躍した優秀な指導者や分析官が不足しているため、育成の質に差がある。スペインのビッグクラブの下部組織では現役時代に有名だった選手

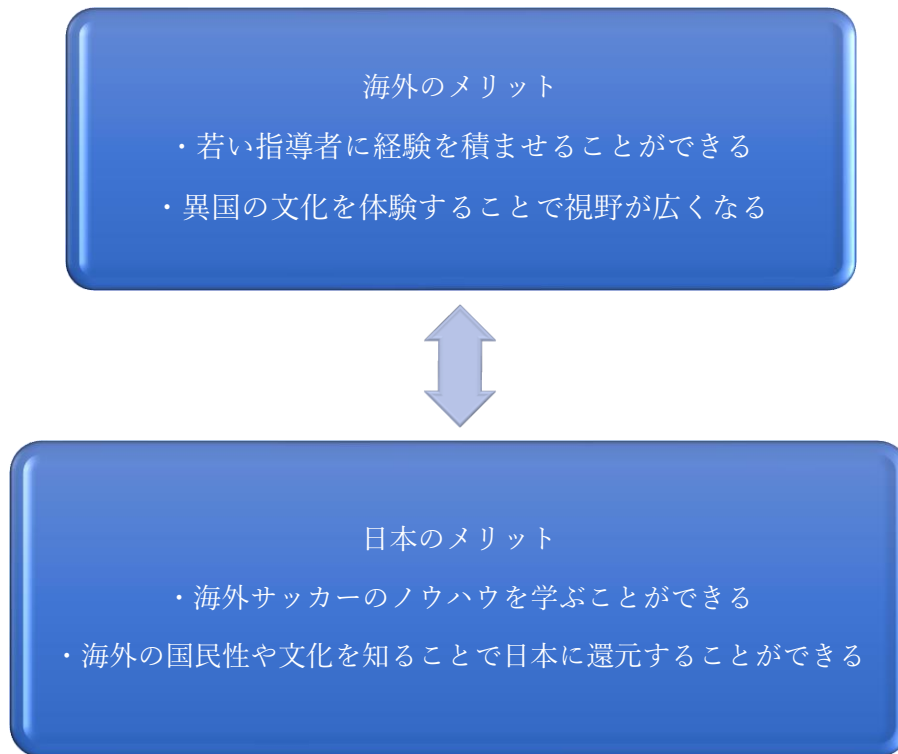
が指導者として活躍していることが多い。現役を引退した後に指導者になりたいと考える選手も多く、指導者としての経験を積ませるために下部組織の指揮を任せることが多い。この際、現役時代に世界で活躍した選手が指導者として日本の若手育成組織の指揮を任せると日本人にとって良い刺激となる。日本の若手育成組織では日本人の指導者がほとんどであり、海外の考え方を選手に教えることが難しくなる。通訳を用意することで海外の練習も取り入れることができるため、日本の若手育成組織はトップチームだけではなく下部組織でも外国人に指揮を任せたいことを勧めたい。

さらに、外国人が日本に来るだけではなく、日本人が海外に行って指導者の勉強をすることが必要となる。日本人の選手が海外の下部組織に所属することはあるが、指導者が海外の下部組織を指揮することは少ない。海外のほうが練習内容や戦術で優れているため、日本の指導者が留学できる環境を整えることが重要となる。そのためには、日本サッカー協会やスポンサーが援助を行い、指導者の留学をサポートする体制を作ることが必要となる。

また、Jリーグクラブの下部組織がスペインのビッグクラブの下部組織に資金面で勝つのは不可能なので、世界大会で良い結果を残していく必要がある。FIFA ワールドカップやオリンピックで良い結果を残すことで日本の若手育成が世界に認められることになる。日本の若手育成が世界に認められることによって優秀な選手や指導者が日本に来る可能性が高くなるため、日本サッカーの発展に繋がる。さらに、生活するための住居や日本語教育などの外国籍選手に配慮した環境も必要になるため、トップチームだけではなく下部組織の運営にも力を入れていく必要がある。

海外と日本の若手育成組織が交流を持つことによって生まれるメリットを図表7として載せる。

図表 7：海外と日本の若手育成組織が交流を持つことによって生まれるメリット



4.4. サッカーの競技人口を増やすための改善策

4つ目の課題として、少子化のなか競技人口がサッカーに集中していないことが挙げられる。今後の日本は少子化で更に競技者人口が減少するので、子供たちに他の競技ではなくサッカーを選んでもらうことが重要となる。そのためにも、マスコミやメディアを通してサッカーを目にする機会を増やす必要がある。スペインではサッカーが文化として根付いているのに対し、日本では代表戦しか取り上げられないことが多い。日本サッカーを盛り上げるために必要なことは、FIFA ワールドカップやオリンピックなどの大きな大会で勝つことである。幸い、日本には代表戦だけを見る「にわかファン」の人たちが多くいるので、どのようにしてにわかファンの人々をサッカー好きにしていくかがカギとなる。具体的には、FIFA ワールドカップやオリンピックなどの日本中の人たちが注目する大会の後にJリーグの試合を広告で流すことによって、日本のサッカーに興味を持つ機会を作ることが必要となる。Jリーグのクラブは全部で58個あり、日本中に存在しているため試合を見に行くことが簡単である。Jリーグのクラブもホームタウンにポスターやチラシを配布することでにわかファンの目に入る機会も増えることになる。サッカーが身近になることで子どもたちが興味を持つことになる。サッカーの競技人口が増えることにより、今後の日本サッカーの発展に繋がるため、日本人の生活にサッカーを浸透させることが必要となる。

さらに、サッカーを始めた子どもたちが途中でリタイアすることを防ぐために、指導者のコンプライアンス研修にも力を入れて過酷な練習や体罰などを減らしていく必要がある。日本では指導者の持論を押し付けてしまい選手が自分で考える機会が少ない。日本人が現在まで作り上げてきた教育観念を見直し、選手の主体性を尊重する環境に変えていく必要がある。

以上のことより、サッカーの競技人口を増やすための改善策として、以下のような点が挙げられる。

- 子どもたちがサッカーに興味を持つためにメディアやマスコミに取り上げてもらう。
- Jリーグのファン層にわかファンを取り込む。
- 子どもたちがサッカーをリタイアしないために指導者のコンプライアンス指導を行う。

5. おわりに

本論文では他のスポーツと比較しても世界大会で良い結果を残せていない日本サッカーに注目し、スペインと日本の若手育成組織の比較を行った。

第2章では、日本代表の世界大会での結果を整理し、日本サッカーの実力を確かめた。さらに、日本代表のFIFAランキングの推移を見ながら過去から現在までどのように成長してきたかを考察した。また、日本代表と同時にスペイン代表の世界大会での結果を整理し、強豪国としての立ち位置を把握した。日本代表と比較して、スペイン代表はFIFAワールドカップやオリンピックで良い結果を残しており、戦術なども似ていることから参考とすべき国であることがわかった。さらに、スペイン代表のFIFAランキングの推移を確認したことにより、過去から現在まで長い期間強豪国であることが明らかとなった。強豪国は過去からの積み上げがあるため、現在でもFIFAランキングの上位に位置している。

第3章では、日本とスペインの育成カテゴリーを述べ、選手の育成方法に違いがあることがわかった。さらに、日本とスペインの若手育成の特徴を明確にして比較することにより、日本の若手育成組織の優秀な点と課題を詮索した。その結果、日本の若手育成組織ではJリーグクラブの下部組織だけではなく、高校の部活動や大卒でもプロサッカー選手になることができる多様性という良い面があった。その一方で、長時間の反復練習をすることで練習の効率性が悪いことや、オフ期間を設けず長時間練習を行うことで選手の疲労や怪我に繋がること、日本の若手育成組織は世界中からスカウトすることがないため優秀な外国籍選手とプレーをする機会が少ないこと、少子化のなか人口に対するサッカーの競技者人口比率が高くないことなどの悪い面もあった。

第4章では、第3章で明確となった練習の効率が悪い、休日が少なく体に負担をかける、育成年代から優秀な外国籍選手とプレーをする機会が少ない、少子化のなか競技人口がサッカーに集中していない4つの課題に対して改善策を提案した。

日本より人口が少なくてもFIFAランキングの上位に位置している国は沢山あるため、日本サッカーが世界大会で良い結果を残していくためには抱えている課題を少しずつ取り除いていく必要がある。そのためにも、今回提案した改善策を日本の若手育成組織に活用してもらいたい。日本サッカーが発展していくときには同時に他国も発展していくため、強豪国との距離を縮めるのは時間が掛かり簡単なことではないだろうが、日本がFIFAワールドカップやオリンピックで優勝する日が来ることに期待したい。

参考文献

- アジア最終予選 (Road to Qatar) 特設ページ-JFA
https://www.jfa.jp/samuraiblue/worldcup_2022/final_q/ (参照 2022-11-05)
- W杯：大会別全成績 <https://worldcdb.com/AWC2.htm> (参照 2022-11-07)
- サッカーのユースとは？高校の部活動との大きな違いを解説
<https://activel.jp/football/tG2Qq> (参照 2022-11-14)
- 今や新人選手の半数以上に！Jリーグに大卒Jリーガーが増える理由
<https://sakareko.com/domestic/16904/> (参照 2022-11-15)
- スペイン代表を多く輩出するスペイン各クラブの下部組織の構造とは？
<https://www.all-stars.jp/news/cantera-e-learning/> (参照 2022-11-20)
- 高円宮杯 JFA U-18 サッカープレミアリーグ 2022
https://www.jfa.jp/match/takamado_jfa_u18_premier2022/ (参照 2022-11-23)

(16,173 字)